

《2023 年 4 月 限定サロン（通算 318 回）報告》

After コロナのリスタート

ーサロンファミリーの周辺でー

中塚義実・小松俊介（筑波大学附属高校）、柳りこ（多摩大学 4 年）、
田中俊也（三日市整形外科）、笹原勉（日揮グローバル株式会社）、
本多克己（㈱シックス）、磯和明（少年サッカークラブコーチ）

【日 時】2023 年 4 月 20 日（木）19:00~21:00 ※終了後は(オンライン)懇親会（~23:00 過ぎ）

【会 場】オンライン（Zoom）

【テーマ】After コロナのリスタートーサロンファミリーの周辺で

【演者と話題】中塚義実（筑波大学附属高校・保体科）…高校現場におけるコロナ禍の 3 年間

小松俊介（筑波大学附属高校・美術科）…南極派遣隊におけるコロナ対応

柳りこ（多摩大学 4 年）…コロナ禍の学生生活と就職活動

田中俊也（三日市整形外科）…医療現場の立場から

笹原勉（日揮グローバル株式会社）…海外勤務の立場から

本多克己（㈱シックス）…スポーツイベントの周辺で

磯和明（少年サッカークラブコーチ）…少年サッカークラブの周辺で

【参加者（サロンファミリー）13 名】★は NPO サロン 2002 会員、◎はリアル参加

◎磯和明（少年サッカークラブコーチ）、◎奥山純一、★小池靖、小松俊介（筑波大学附属高

校）、★笹原勉（日揮）、田中俊也（三日市整形外科）、★茅野英一（NPO サロン 2002 監事）、★

土谷享（KOSUGE1-16 / NPO サロン 2002 理事）、◎★中塚義実（筑波大学附属高校 / NPO サロン

2002 理事長）、野村忠明（会社員 / 埼玉ソーシャルフットボール協会運営委員）、◎★本郷由希

（会社員 / NPO サロン 2002 理事）、★本多克己（㈱シックス / NPO サロン 2002 理事）、柳りこ

（多摩大学経営情報学部 4 年）

【報告書作成】柳りこほか

【目次】

サロン通信 2023 年 4 月号（2023.3.18.）

I. After コロナのリスタート①ー学校の周辺で

II. After コロナのリスタート②ー医療現場、海外勤務、地域スポーツの周辺で

おわりに：2023.4.21.ML 投稿

【キーワード】

コロナ禍、With コロナ、After コロナ、学校、南極
派遣隊、就職活動、医療、海外勤務、スポーツイベ
ント、少年サッカー、中塚義実、小松俊介、柳りこ、
田中俊也、笹原勉、本多克己、磯和明

サロン通信 2023年4月号

2023.3.18. (中塚義実)

2022 (令和4) 年度もあと少し。私の勤務校 (異動なし!) では3月16日に卒業式、17日に終業式がありました。3月21~24日には、2019年8月以来の蹴球部の合宿があります。「After コロナ」のリスタートです。

ということで、4月最初の月例サロンはファミリー限定で、それぞれの周辺の「After コロナ」を語り合う場にしました。何名かに話題提供してもらいますが、このほかにも「こんなネタがある」「しゃべらせてほしい」は大歓迎。ぜひお申し出ください。

《2023年4月 限定サロン (通算318回) 案内》

【日 時】2023年4月20日 (木) 19:00~21:00 ※終了後は (オンライン) 懇親会

【会 場】オンライン (Zoom) および対面 (対面会場と懇親会は調整中)

【テーマ】After コロナのリスタートーサロンファミリーの周辺で (仮題)

【演 者】中塚義実 (筑波大学附属高校)、本多克己 (榊シックス)、
田中俊也 (三田市整形外科)、柳りこ (多摩大学生) ほか、サロンファミリーの皆さん

【概 要 (理事長より)】

2020年初頭から丸3年続いたコロナ禍が、ようやく落ち着こうとしています。皆さんの周辺でもさまざまな変化がみられるのではないのでしょうか。

2020年2~3月が中止となったサロン2002の月例会 (このころまで「月例会」と言っていた。いまは「月例サロン」) は2020年度からオンライン方式を導入し、4~5月に「新型コロナにどう向き合うか」、7月以降は「With コロナの時代に向けて」を5回シリーズで取り上げ、12月の公開シンポジウムで「With/After コロナの時代に向けてーコロナ禍でみえた“ゆたかなくらし”の新しいすがた」について語り合いました (いずれもHPに報告書があります)。

今回はその続編です。皆さんの周りでこの3年間何があり、そしていまどうなっているのかを、近況報告を兼ねて語り合う、ちょっと気楽な交流会です。

2023年度のサロンファミリーの登録フォームにあったアンケートで、サロン2002への期待として多くの方が「サロンファミリーの交流」を挙げていました。今回はそのニーズにこたえるものでもあります。このような「限定サロン」を何度か開くことを考えています。

多くの方のご参加をお待ちしています。それぞれの「After コロナのリスタート」を語り合いたしましょう!

【参加申し込み】

参加希望者は Slack、ML、または中塚・事務局への直接メールでお申し込みください。

対面会場が決まったら改めてご案内します。参加費無料です (飲食代は割り勘)。

【報告書】後日、NPO サロン 2002 のホームページ上で報告書を公開します。

報告書作成者募集中!

*****参考*****

2020年4月例会「新型コロナにどう向き合うか①ー学校・職場 (と自宅) ・スポーツイベント

https://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2020/2020-4.pdf

2020年5月例会「新型コロナにどう向き合うか②ー一部活動・市民イベント・障がい者の現場より

https://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2020/2020-5.pdf

I. After コロナのリスタート①ー学校の周辺で

1. コロナ禍の3年間：中塚義実（筑波大学附属高校・保健体育科）

2020年4月の月例会「新型コロナにどう向き合うか①」で学校現場の様子をご紹介しました。その後の学校の様子についてざっとご紹介します。

2020年3月から、すべての学校の生徒たちは登校できなくなりました。その年度の卒業式は互いの距離を2メートルとりながら、卒業生だけで行いました。4月には緊急事態宣言が発令され、入学式は中止。筑波大学附属高校の生徒たちは3月から5月末まで登校できませんでした。この年に入学した生徒たちが、今春卒業した学年です。彼らはコロナ禍の学校で3年間を過ごしたことになります。

2021年度の入学式は、制限付きですができました。しかし新入生と2、3年生の対面式をリアルで行うことはできません。3人だけの応援団が1年生にエールを送る様子は、オンラインで各教室に配信されました。各教室をオンラインでつないで同時視聴できるようになったのは副産物の一つです。

2022年度は入学式に保護者を入れました。対面式もグラウンドで、久しぶりに全校生徒が集まる形でできました。全校集会は普段は前庭で行いますが、前庭が密になるということで、720名の全校生徒がグラウンドに集まりました。応援団も人数が増えて、対面で応援してくれました。2023年度は通常モードでの入学式、対面式です。

毎年12月に筑波大学附属高校の研究大会があります。どの教科も公開授業をやっていましたが、コロナ禍での対面公開はできません。保健体育科では「コロナ禍の3年間を振り返って」と題して高校3年生にアンケート調査を実施し、3年間をコロナ禍の学校で過ごした彼らのコメントから見えるものを発表しました。高3の秋ごろになってようやくコロナ対応も緩和され、ノーマスクでよくなってきました。今年度の研究大会がコロナを取り上げるラストチャンスです。コロナの中で考え、実践してきたことは、教科の意義を考えるうえでものすごく重要でした。そして、今春卒業した彼らがコロナ禍の3年間をどのようにとらえているのかを把握しておきたいと思いました。

以下、その中身をかいつまんで報告します。

<参考：つくばリポジトリ「コロナ禍の3年間を振り返って-高校3年生のコメントからみえるもの」

<https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/records/2006480>>

2020年4月に、生徒たちに保健体育科からメッセージを送りました。紙だけでなく、教員が語る形の動画メッセージです。「1. 社会の一員として自覚を持ち責任を持って行動してください、2. 運動・栄養・休養のサイクルを確立し自分自身の健康を保持・増進してください、3. この機会に学んでください、4. “遊び心”を持ってポジティブに取り組みしましょう」という項目です。このメッセージは生徒だけでなく全ての人にとって大切にしてほしい心構えだと思います。このメッセージについて、ある高校1年生がこんなコメントを書いてくれました。「まだ高校に行ったこともない中、先生から初めてメッセージをいただけてとても心強かったのを今でも覚えている。自分は自粛期間も十分に楽しめたと思うが、そのきっかけがこの文章だったので本当に感謝するべきだと思っている」。

休校中のこの時期、生徒の生活は夜型になり、運動不足でスマホ依存に陥っていました。これではアカンということで、保健体育科では15分間の「朝体操」を平日に実施することにしました。学年ごとにZoomを開き、希望者が入室して画面の前で体を動かす活動です。担当教師は日替わりで進行役を務めます。これはなかなか好評でしたし、私たちもやりがいがありました。

生徒たちが初登校できたのは6月です。Zoomの中で顔は見えているけど「こんなに背が高かったんだ」ということを知ったのはこのときです。体育の授業はマスク着用ですが熱中症対策も考慮しなくてはなりません。更衣室で密にならぬよう、手洗いやうがいの時間を確保しながら進めました。

コロナ初年度、分散登校期の体育実技について生徒たちにアンケートを実施しました。「仲間との交流という目標を達成できた」と考える生徒が9割以上いたのが印象的でした。体育の意義はこういうところにあるのだなと感じました。

今年卒業した生徒たちが3年になった2022年度より、50分授業に戻りました。部活動も自主練含め、普通にできるようになりました。高3の秋以降の体育は、これまで体育の授業でやったことがない種目を生徒たちが探し、仲間を集めて講座を立ち上げる選択授業です。「モルック&ボッチャ」という講座が立ち上がり、日本モルック協会のHPを通して芝公園で日曜日にモルックをしている達人の方々に来校してもらいました。こういったことが再びできるようになったのはよかったです。

1年次は校舎に入る前の手洗いが必須で、教師の当番もつけていました。2年次からは徐々に緩和し、3年次からは各自に委ねられます。始業前にホームルームで健康観察をしていましたが、それも2023年4月からなくなりました。何といても大きいのは、朝、昼、放課後の自由時間です。自主・自律・自由を掲げる本校で最も大切なのは、生徒たちが思い思いに過ごせる時間なのだとすることを改めて感じました。ここで「ちゃんと遊ぶ」ことができるかどうかは大きな分かれ目です。

コロナ対応の3年間は、間違いなく「歴史的な転換点」でした。リニューアルするチャンスですし、何を残し、改めるかを考える必要があります。それは「これからの学校のすがたを考える好機」でもありました。学校離れが猛烈に進んでいます。学校と地域の連携も求められます。そして「“遊び”の重要性」が再認識できました。

最後に、3年間をコロナ禍で過ごした今春の卒業生のアンケート結果を一部ご紹介します。

◆コロナ禍の3年間を振り返って、あなたが「失ったもの」について教えてください。

- ・僕は何も失っていません。むしろ多くのことを得ました（13件同回答あり）
- ・1,2年次は部活と授業以外にほとんど自由時間がなく、遊べなかったし人間関係も広がらなかった。
- ・放課後の思い出。放課後も友達とパンなど食べて喋りながら過ごせると思っていた。
- ・多すぎて書ききれませんが、入学式はじめ、多くの行事が奪われたのは大きいです。これまでの高校生でいう「普通の高校生活」が送れなかったように思います。しかし、人間というのは怖いもので、今ではいい思い出が記憶の大半を占めています。「普通の高校生活」は過ごすことができなかつたけれど、新しい形態に対応し、その中で最大限楽しもうとしたこと自体が貴重なことだったのかもしれない。
- ・本来得るべきものがどのようなものだったのかわからないです。少なくとも友人や部活の仲間と過ごす大事な時間は失ったと思います。

◆コロナ禍の3年間を振り返って、あなたが「得たもの」について教えてください。

- ・当たり前だと思ってきた学校生活の尊さ。毎日会えることが当たり前でないということ、他人を思いやる生活、コロナ禍でも工夫して行事はできるということ。
- ・自分で過ごす時間は増えた。またzoomやオンライン活動の技術も、コロナが無ければこれほど早期に習得されなかつただろう。
- ・団体行動、クラスでの話し合いなどが無くなり、同調圧力を感じずに三年間過ごせた。そのため、一人で行動したり、友達に流されずに自分の思うように行動することへの恐怖を克服できた。
- ・「コロナだからできないや」と言わず、「今できることを見つける」ことを、学校生活を通して習慣化できたと思う。これは将来、社会に出たときにも役立つことだと思う。
- ・限られた状況でどれだけ楽しめるか模索する力や、より大切で貴重になった行事や対面での関わりの大切さを学んだ。
- ・コロナ禍であったことによって得たものは特にない（12件の同回答）

2. 南極観測隊の一員として：小松俊介（筑波大学附属高校・美術科）

筑波大学附属高校で美術を担当しております小松と申します。福島県いわき市出身で、非常勤を兼任しながら作家活動をしておりました。この学校に着任して6年目です。2022年11月から今年3月まで、南極地域観測隊の同行者として学校を離れていました。4月に戻ってきたところです。

南極地域観測隊は、国立極地研究所の南極観測センターが運営を担当します。国立極地研究所広報室と公益財団法人日本極地研究振興会が協働で「教員南極派遣プログラム」を2009年から立ち上げ、毎年2名ずつ教員が南極へ派遣されています。私は、第64次南極地域観測隊(夏隊)に同行者として参加しました。私と一緒に、野田豊先生（奥多摩町立古里小学校教諭）が派遣されました。最近では理科だけでなく、教科特性を生かす形でさまざまな教科の教員が派遣されるようになってきました。教員派遣の最大のミッションは、昭和基地と勤務校をつないで行う「南極授業」です。また、教員派遣での経験を現場に持ち帰り、教育現場でも役立ててくださいというねらいです。南極授業はスタートに過ぎず、帰国後の活動がより重要となります。

筑波大学附属高校と極地観測所のつながりとしては、第1次隊から9次隊まで参加していた村山雅美さんが、前身校の旧東京高等師範学校附属中学の卒業生であることが分かりました。また、63次隊の越冬隊に医療隊員として参加されていた澤友歌さんは附属高校の卒業生で、何かとご縁を感じる出会いがありました。

出発当時、2学年の担任を持っている時に南極に挑戦するというので、担任を誰が引き受けてもらえるかという問題があったのですが、中塚先生が引き受けてくださいました。出発直前には、サプライズの壮行会を生徒たちにしてもらいました。

ここからは、After コロナのリスタートということで、南極観測隊のコロナ対応をご紹介します。本来（コロナ以前）であれば観測隊はオーストラリアまで飛行機で移動して、先に日本を出発していた砕氷船しらせに乗船しますが、昨年に引き続き感染対策として観測隊全員が10日間の隔離期間を設けて、日本からしらせに乗船しました。PCR検査は3回実施し、陽性になってしまうと参加できなくなるという緊張感のあるものでした。オーストラリアに行くまで3週間程かかるのですが、赤道を通過してオーストラリアまでの道のりは、海と空の変化がとても美しく、印象に残っています。オーストラリアで乗船してくるメンバーもいましたので、その時は全員が1週間ほどマスクを着用し、昭和基地に絶対コロナを持ち込まない、ゼロコロナ対策をとっていました。別動隊として、船でなくドロマランという飛行機で昭和基地に入るチームがいましたが、昭和基地内で隔離施設を設け、そこでゼロコロナ対策を行いました。お弁当を毎回準備いただき、快適に過ごすことができました。隔離施設のホテルはものすごく良く、一人のスペースとして十分なデスクと洗濯機、トイレ、お風呂があり、ベッドはダブルでした。これが船に乗ると4分の1のスペースとなり、2人部屋の生活環境になります。結果的に全員陰性で乗船することはできましたが、マスクはつけましょうということで、1週間はマスクをつけての生活でした。それ以降はマスクをせず、対面でお酒を飲むことも可能になりました。通常よりも長い時間を船で一緒に過ごすこととなりますが、一致団結するための有意義な時間となりました。赤道祭という祭があり、赤道通過時に無事を祈って催しをやったり劇をやったりします。そこに観測隊も参加してチームを創っていくようなイベントがありました。

厳重なコロナ対策のおかげで、昭和基地ではマスクを着けることなくコロナ以前の通常の生活をしておりました。このスライドは南極授業の様子です。昭和基地ではマスクをしていませんが、東京の生徒たちはマスクをしています。

南極観測隊の体験については、また別の機会に改めてご紹介します。今回は南極観測隊のコロナ対応の部分についてご報告いたしました。

3. コロナ禍の学生生活と就職活動：柳りこ（多摩大学経営情報学部4年）

いま大学4年生で就職活動真ただ中です。高校3年の2月からコロナが出てきて、大学受験の最中でしたが、コロナがここまで影響を及ぼすと思っていなかったの、コロナになって受験ができなかったらどうしようと、軽い気持ちで話していたのを覚えています。

コロナが徐々にはやりだして、受験がおわった3月にはマスクは必須、大人数で集まるのはだめと言われはじめました。高校の卒業式は教室での卒業証書配布で、卒業式はありませんでした。楽しみにしていた卒業旅行にも行けずに卒業です。大学の入学式もありませんでした。大学の授業は5月からのスタートで、毎日Zoomを使った授業で、起きてすぐに授業を受けるという形でした。友達もできず、授業もオンラインなので通信環境もあって集中できず、何のために大学に入ったのだろうと思うときも多々ありました。

多摩大学では秋学期から全授業で対面形式になったので、9月からは対面授業を受けていました。ほかの大学に比べると早い再開で、友達もできましたし、ゼミ活動で好きなことをすることができたので良かったと思います。高校の友達に聞くと、3年生の春学期までオンライン授業をしていたり、毎日通っている人はあまりおらず、かわいそうだと感じました。

いまは就職活動をしています。イベント関係や広告業界に行きたいと思っていて、スポーツに関わる仕事がしたいと思っています。説明会も面接もオンラインと対面がありますが、対面で行われる場合はマスクを着用しての面接になります。交通費のことを考えるとオンラインのほうが良いかなと思いますが、直接行くほうが私は好きです。2~3年前の先輩と比べると採用率も復活してきていますが、コロナ以降、新卒の採用をしていないところはまだあり、苦勞しています。

<ディスカッション①>

中塚：「学校の周辺で」ということでの話題提供でした。ご質問や補足があればどうぞ。

茅野：一昨年前まで帝京大学の教員をしており、Zoomで丸2年間授業を行っていました。学生の不安や心配等を画面越しに感じてはいるものの、どう対処してよいかわからない。せっかくZoomに来てもらうのだから、Zoomを生かして何かできないかということをいつも考えながら授業展開していました。最初の工夫は、自宅の21インチ画面では足りないと思ったので27インチを買い、学生の顔が見られるようにしたことです。次に、学生から「聞き取りにくい」との声があったので、マイクを買いました。学生からは「聞こえ方が違う。よかった」という声をいただきました。この他にもパワポの作り方などいろいろ工夫しましたが、わからないことがあったらリアクションボタンを押して言ってほしいと学生に伝えました。努力はしたけど失敗したと思うのは、1年生の授業の中で「友達ができない」という話が出てきました。聞き流してしまいましたが、Zoomの中でブレイクアウトルームを作って学生同士のディスカッションの時間を作ってあげればよかったと思いました。

翌年以降、自分の話は4分の3ぐらいにして、そのほかにはブレイクアウトルームの中にランダムに学生を入れて課題を行う形にしました。学生には「メールでも電話でも」と伝えましたが、「いまはインスタですよ」と言われました。インスタを交換して困ったときには助け合ってと話をしました。

画面を通して、ちゃんとノートをとっているかどうかが見えてきます。教室の授業よりも見えました。授業によっては横になって聞いている学生がいたりしましたが、コロナの中ではそういった授業もあってよいだろうと思っていました。在宅勤務で働いているおやじさんとか在宅で勉強している兄弟が、僕がやっている授業を聞いています。本気になって聞いていることもありました。そこはよい刺激になりました。

顔出しでやってくれという話はしましたが、それ以外は言いませんでした。

中塚：ありがとうございます。私もオンライン授業をいくつか行いましたが、パワーポイントに音声が入られるということを知りました。いろんなスキルが獲得されたこの3年間でしたね。

II. After コロナのリスタート②ー海外勤務、医療現場、地域スポーツ

1. 海外勤務の3年間：笹原勉（日揮グローバルビジネス／台北駐在）

台北に来て1年半になります。ここに至るまでいろいろありました。

台湾に来る前に、2020年3月2日に、ミャンマーのヤンゴンに赴任しました。日本はすでにコロナがはやっていましたが、ミャンマーは患者がいまませんでした。しかし、医療態勢が脆弱だったため、3月25日に最初の患者が出たタイミングで一時帰国を命じられました。新しく1年契約したマンションも、1週間も住んだだけで、結局その後二度とミャンマーに足を踏み入れていません。

1年ぐらい経過してコロナが落ち着いてきたころ、ミャンマーではクーデターがあり、さらに行けなくなっていました。マンションの契約は切れてしまいましたが、荷物やお金を置いていたので、「リモート引越し」を頼み、向こうの業者に部屋に入ってもらい、スマホで画面を見ながら指示をしながら引越ししました。ヤマトさんに荷物の輸送をお願いしましたが、クーデターがあって海外に出る飛行機が飛んでいない状況でした。月に2人ぐらいの引越しで40人待ちだったので、いつになるかわかりません。10ヶ月待ってやっと荷物を受け取ることができました。

事務所も500万円ぐらいかけて家具一式と内装を新しくそろえたのですが、一度も使うことなく2年の契約満期を迎え、すべて廃棄しました。私自身はミャンマーには行かず、内装も、解約時の原状復帰もすべてローカルスタッフ1名でやってもらいました。

仕事柄、飛行機に乗る機会は非常に多く、2007年ごろから飛行機に乗ったらすべて記録をつけています。2019年までは1年平均で54.5回、飛行機に乗っています。2019年は53回乗りましたが、2020年は5回、2021年は3回、2022年は7回です。2022年が多いのはワールドカップに行っているからです。極端に飛行機に乗る機会が減りました。

ミャンマーでの仕事がなくなったので、いまは台湾に駐在しています。2021年に台湾に2回渡航しましたが当時は14日間の隔離があり、ホテルの部屋から一歩も出られませんでした。仕事はほとんどリモートで何とかできるのですが、毎日決まった時間に配達される食事が問題でした。リモート会議と重なって時間通り食事が取れず、食事が冷めてしまうことがよくありましたが、布団にくるんでおくと食事が温かいまま食べられるという技を習得しました。

台北に着いた当初の隔離期間は、体幹トレーニングをしたり、ネットで動画をみてフィットネスも取り入れていました。歩くことに関しては、端から端まで6歩の狭い部屋で、1日一万歩を目指してやっていました。NHKのニュースを見ながら、ニュースの内容が変わるたびに歩き方を変える工夫をして目標クリアしてました。今では隔離もなくなり、マスク規制も徐々に緩和され、今週からマスク規制はなくなりました。しかしいまも8割以上の人がマスクをしています。特に女性は、マスク率100%ですね。

2. 医療現場の3年間：田中俊也（三日市整形外科）

私の本職は整形外科です。なかなかアフターコロナにはなりません。いまも増加傾向にあるので、第9波は来るのだらうと思います。G7ありきのマスク規制の緩和だったと考えます。

屋外でのマスク着用は自由ですが、医療機関や、お年寄りが多い介護施設などではマスクをつけてくださいとなっています。混雑した交通機関でもマスクの着用が推奨されています。できればつけて

いただきたいというのが医師会の考え方です。くしゃみや咳のエチケットは普及していますが、飛沫で何百人に移してしまうことがわかっています。注意が必要です。

新型コロナの最初は2019年の武漢であると考えられています。この時は台湾の対策がすごかったですね。12月に武漢から台湾人は強制送還され、隔離され、陰性を確認して12日後に入国させるという形です。中国で大変なことが起きているということを台湾はいち早く知っていました。武漢で耳鼻科の先生が、いままで見たことがない風邪の菌だと言って動画を出しましたが、本人はその2~3か月後になくなってしまいます。これが中国政府、北京政府からの弾圧で、ウソを流布したということで逮捕されてしまいます。結局ここから、見たことがないウイルスの発生が現実になりました。

武漢は東京並みの1000万人都市で、東西南北の交通の要です。北京にも上海にも、香港にも行ける便利なところで、武漢で発生すると中国国内は24時間以内にウイルスが広がってしまいます。航空機も発達しているので、おそらく48時間以内に、北極と南極以外の世界中に広まってしまいます。

オードリー・タンが発動し、台湾では水際対策を徹底しました。インフルエンザ、SARS（サーズ）の時に痛い目に合っているのだから、日本でいう厚生労働省はしっかり対応しています。日本でマスクが足りないと言っていたときに台湾がなぜ充足していたかということ、オードリー・タンが発明したアプリで1週間に1人2枚までとしました。留学生等、事情を知らない人に分けてあげることをしていました。

2020年2月、ダイヤモンドプリンセス号の横浜寄港で、日本でもようやく新型コロナウイルスがやってきたのを認識しました。このころ高校の同窓会が横浜のホテルであり、ホテルの眼下でこの船を見ていました。冗談半分でウイルスの話をしていたら、何人かが下船して新幹線等で各地方に帰ってしまったとのこと。静岡のとあるスポーツジムにそのうちの一人が立ち寄り、ジムは閉鎖に陥ったということがありました。わからないことだらけだったので、対応には非常に苦労しました。

2020年3月1日にWHOはパンデミック宣言をし、世界的な規模で対処しなければだめということをお言います。5月には県をまたいではいけない、東京オリンピックは延期ということになりました。

2021年5月ごろからようやくワクチンを打ち出して、ウイルスに対する武器を持つことができます。デルタ株が出てきて、致死率は高くないが感染の波がやってきました。2021年の暮れから年明けにかけてはオミクロン株が出てきます。症状は軽いが後遺症がひどい。第7波の時に懸念したのは、カタールワールドカップのタイミングで波がやってきて無観客となることでした。しかしFIFAは力強く「無観客は許されない」として、規制は緩和されました。最初はワクチンを2回接種せよとかPCR検査の陰性証明が必要だとか、向こうに着いたら2日間の陰性証明が2回ないとだめだとかいろいろ言われていました。万が一発症したらどうするか。日本に戻るときも2週間の隔離はさすがに困ります。Visit JapanというWEBサイトができ、登録すれば隔離はなし。ゾコーバという治療薬も出てきます。第7波は非常に肝でした。世界各国がコロナに慣れてきて、マスクなしの生活や、予防接種を使いましょうという話が出てきます。（政府の新型コロナウイルス感染症対策分科会長を務めた）尾身茂氏先生は、WHOの事務局長になるべき人だったと思います。香港の女医に負けなければ、コロナ対策も全然違うものになっていた可能性があります。

私が日ごろ行っているジムでは、3月1日以降のマスクの着用について、入館するまでは自由ですと言っています。プールとかジムエリア等、一人で行うエリアは一人でいいのですが、スタジオレッスンは40人弱が一室に入るので、そこはマスクを着用してくださいとしています。来館時には体温測定やアルコール消毒が求められます。日本医師会が提言していたことをスポーツクラブでもやっている、特に屋内の密閉された空間は危ないですよということは、引き続き変わりません。

日本の検疫は2週間のホテル監禁になります。そもそも水際対策で侵入を防ぐことはできないということは証明済みです。ワクチンも欧米頼みの日本にとって、下手に水際対策を強化した結果、独自の変異株がはやり、日本にとって自殺行為となります。

2021年はGo toキャンペーン、旅行割引キャンペーンを行い、相反することを同時にやっていました。大学生の娘は遊びに行っていました、表と裏の顔があると思いました。日本医学会の学会大会は今週から医学教育をメインテーマに開催されていますが、コロナの演題が4分の1ほどを占めています。オンラインでも見ることができます。3密を避けて、手洗いうがいをしっかりする、感染から身を守り、大事な人も守りましょうという内容が多いですね。

2類から5類になると何が異なるかというと、ワクチンは無料ではなくなり、コロナで病院にかかると診断や診療は全部有料になります。感染症の専門家ではないのですが、受診抑制があったのは残念でした。防げたはずの骨折やリウマチ患者が病院に行けなくなり、治療が遅れてしまったことがありました。

私の周りの様子をざっとご報告しました。

3. 地域スポーツの3年間：本多克己（榊シックス）

民間企業、NPO、サッカー協会、フットサル連盟の立場でスポーツに関わっています。2020年5月の月例サロンで当時の状況を報告させていただきました。2020年3月には2つのリレーマラソン大会を予定していましたが、直前になってすべて中止となりました。2月16日の東京マラソンが中止となり、参加費は返金しないという先例があり、それにならってほぼすべてのマラソン大会が中止、いずれも参加費返金なしとなりました。私たちの事務局にも、参加者や他の自治体関係者から電話が多数かかってきました。悩んだ結果、ランナーの安全のために中止を決定しました。直前の中止となり、参加費は返金しないとしましたが、翌年度に参加される場合は割引対応することとしました。

グリーンアリーナ神戸という、兵庫県下有数の体育館を指定管理者として運営しています。こちらでも神戸市からの自粛要請があり、トレーニングセンターの営業は中止。2か月あまりの営業停止期間を経て再開しました。コロナ禍の最初のころはスポーツジムがクラスターになったことがあり、5月時点で再開は困難な状況でした。さまざまな制限を設けながら再開しましたが、売り上げは半分以下となり、いまでも7割ぐらいの売り上げで、大きな打撃を受けています。

スタッフの給与はどうするかというと、当時は様々な助成金がありました。totoの助成金は、通常であればイベントが中止になったらお金は出ないのですが、コロナの影響で中止になった大会に関しては赤字補填しますとことで助成していただきました。助成金の手続きが簡単になり、こんな簡単にお金を出してよいのかと感じました。おそらく政治家が国民から突き上げられて、とにかくお金をばらまけとなったのだと思います。その後、不正受給があったということで、たくさん逮捕者が出るといった大きな問題もありました。

フットサルの民間大会「ホンダカップ」も2020年は中止し、コロナの2年目から再開しました。いろんな意味で打撃を受けています。

ただ、コロナがあったからできるようになったこともあります。一番大きいのは動画配信の活用です。いままでは、大会に来場された方だけの観戦でしたが、動画配信によって会場に来られなかった家族の方も観戦できるようになりました。サロン2002のU-18フットサルリーグチャンピオンズカップも同様で、長野の大会をYouTubeで見られるようになりました。初年度は人数・対象の制限をしてZoom配信としましたが、2年目からはYouTubeでの配信で、誰でもYouTubeで見られるようにしました。1,800人の方に見てもらえました。

配信することでたくさんの方に見てもらえるようになったのは大きな成果ですが、配信によってサロン2002のメンバーがいろんな形で関与されるようになり、サロンにとっても価値ある事業になってきたと思います。

神戸市にある「アスコフットサルパーク摩耶」というフットサル場は、屋内3面で正式な試合ができる施設です。WEリーグのアイナックを運営するアスコホールディングスという企業が運営をしてい

ましたが、コロナの影響で手放すことになりました。この4月から兵庫県フットサル連盟が施設を買い取り、運営をスタートしています。フットサル連盟が自前で造れるような施設ではないのですが、良い条件で買い取ることができ、運営しています。

大会を開くときに毎回ガイドラインを設けます。ルールをどうするか迷いますが、実際にやってみた大会・イベントでクレームはほとんどありません。唯一のクレームは、県外からの来場者に関する抵抗感です。長野で全国大会をしたときに、体育館の駐車場に東京や大阪のバスが停まっていることについて、近隣の方からクレームが入ったことがありました。クレームはこれぐらいです。

たくさんの人から「開催してくれてありがとう」という言葉をいただいています。この3年間は、いままでないぐらい参加者の方から感謝していただけたという印象があります。

4. 少年サッカークラブで起きていること：磯和明（少年サッカークラブコーチ）

コロナと直接関係するかはわかりませんが、少年サッカーと関わる中で、最近起きた大きなトラブル大会への選手の選考基準について話します。

少年チームとのかかわりは、いま27歳の息子が7歳でチームに入ったときで、父親コーチを始めたのがきっかけです。20年間ぐらい関わっています。子どもが小学5年生ぐらいの時に、各学年の父親コーチの指導方針があまりにもバラバラだったのでクラブ方針のようなものを創り、いまでもサポートする形で関わり続けています。父親コーチが進めていくようなチームの集まりですが、クラブ方針を創ったことにより方向性が定まりました。しかしその後、再び父親がやりたいようにやるように変わってきてしまい、いまに至ります。

直近で起きた問題として、ここ6年間ほどクラブの代表をしていたヘッドコーチ兼代表が、どうしても試合に勝ちたい、自分の子どもをセンターハーフの中心に据えたいとなり、ほかの保護者が文句を言い、子どもにも伝わってしまう状況がありました。ヘッドコーチが家の中で、子どもがいるところでクラブの問題を話していたところ、子どもはクラブが嫌になってやめてしまいました。このようなことがあり、クラブ方針を立て直さなければいけないと思い、何人かのコーチと話し合っているところです。

大会に出る選考基準で話が3つに分かれています。1つ目は、コーチが勝ちたいという気持ちが強く、うまい選手だけ大会や練習試合に出す。大人が行うような戦術を用いながら勝ちに行くという考え。2つ目は、練習試合は練習の成果を確認する場であり、勝敗以前に練習でやってきたことを確認する。だからみな等しく出場させる。一方で大会は選手の目標となるものなので、選手同士にもライバル意識を持たせ、出られない選手はチームを応援していくというものです。大会はベストメンバーで臨むという考え方です。3つ目は育成主眼で、大会も選手にとって何が大切かを学ぶ場です。だから試合出場時間は均等に与えるべきであり、うまい下手は関係ない。事情があつて練習に来られない選手も均等に出場させるべきだという考えです。特に2つ目、3つ目で意見が分かれています。

うちのチームは1つ目の勝利だけを目指すチームではないということは明らかにしていますが、3つ目の均等を挙げているコーチたちは、ボールを蹴ることができる時間を増やすのがメインだと思うが、大会に出場する時間も均等にすべきだと主張しています。

皆さんのご意見をいただければと思います。

<ディスカッション②>

中塚：「アフターコロナのリスタート」ということで、皆さんの周りの様々なトピックをご紹介いただく中で、磯さんが関わる少年サッカーで出てきた課題は、現場に関わる人ならだれでも一度は直面するテーマだろうと思います。本多さんが関わる場所でも同じことがあると聞いています。

本多：「阪神ユナイテッド」という U-18、U-15 の女子チームに関わっています。磯さんのクラブとほぼ同じことが起きています。自分自身サッカーをやってきて、サブの選手はサポートする、応援するのが当たり前と思ってきましたが、いまは異なります。サブの選手は試合に帯同せず、別のところで練習させています。そういったところにも違和感を覚えます。WBC 等でも、試合に出ない選手がサポートすることがクローズアップされており、チーム全体で勝利を目指していくすがたです。スポーツは、本質的には 1 点を取って勝つ遊びなのだから、遊びの部分を大切に、どのように実現していくかを考えていけばよいと思いますが、現実はそのとはいかないことが多いですね。

熊谷：江東区の少年サッカーの代表と区の連盟の役員をしています。少年サッカーの中でも学年で分かれて活動しなければならず、なるべくいろいろな学年が混ざって行きたいのですが、誰かがコロナに感染したらみんなが活動停止になってしまうという問題があったので学年別で活動していました。

江東区のチームは、上の学年の子が下の学年の子に教えるなど、上下の接点をなるべく持つようにするという指針があります。同じように指導者も、学年担当コーチはあっても、一緒に指導する保護者同士、コーチ同士は交流しながらフォローし合い、支え合うことを重視していました。ただコロナもあって学年で固まりすぎる傾向があり、やり方がばらついてしまっている反省があります。

僕のチームは 4 月から活動が平常に戻り、4、5、6 年が一緒にやり、キッズも一緒に練習をし、その中で上の学年が下の学年に教えることを促しています。サッカーの技術的な部分だけでなく、片付けや準備のところ、コーチが「集まれ」と言ったときにリードしていくようなことを徹底するようにしています。そういったことを指導者も再認識しながら、上の学年はどんな指導をしているか、下の学年はどういった指導をしているかを学んでもらいながら、方向性を同じにするよう努めています。

チームとしてのコンセプトが、勝つ方向なのかエンジョイ志向なのかということもあります。チーム内でも指向性のばらつきがあり、同じようなトラブルを抱えていると聞いています。普段から同じ場で話をし、互いに共有することで解決策を見出ししていくことが大切であると感じました。

野村：埼玉ソーシャルフットボール協会は、3 月から運営委員会が対面に変わりました。僕の所属しているチームはコーチがおらず、選手が主体で運営を行っています。みんなで意見を出し合って、みんなで行っています。全国大会に出場したり、それを目指しているチームは、コーチが入ってチーム作りを徹底している感じです。選手主体のチームは、選手がいろいろな意見を出し合いながらみんなでエンジョイしています。

土谷：まずは遊んでいるのか、遊べていないのかを考えます。何が得られたかは、プロセスによって喜び方も違うと思います。そういった意識を、支える側も選手側も共有できているのが健康な組織なのではないかと思います。

小池：埼玉にいたときに 6 年ほど、子どもたちのサッカー指導に携わっていました。いま地方（長野県）に来て思うのは、いろいろな形でスポーツを展開している人たちがいて、それはそれで地域を元気にしていくという意味で大事なことだということです。佐久市は「バルーンフェスティバル」という、ツアー開催するイベントを行っています。私が勤めるバイタルという会社にも「バルーンフェスティバル」に関わる人がいて、自分の会社の熱気球で、春の大会で空を飛んでいました。大学生のチームに貸し出して使ってもらうこともしています。サッカーとは違いますが、イベントで地域を盛り上げるところにいます。

働くことにしても、生きるために働くということと、遊びも働く要素の中にあるということ。これらをいかに組み込んでいくかは一つの知恵なのかなと思います。地域を元気にすることを発信していけたらと思います。

中塚：ありがとうございました。このテーマについてはまた改めて月例サロンで取り上げましょう。

おわりにー2023.4.21.ML 投稿（中塚）

サロン 2002 ファミリー（含 NPO 会員）各位

昨日は久しぶりに筑波大学附属高校に集まったの月例サロンでした。コロナ禍もありますが、セキュリティレベルが高まった本校における学外団体の会合はものすご〜く久しぶりです。対面参加を事前申請された3名と中塚は、散らかりっぱなしの体育教官室でPCを開いて参加し、全国各地と台北からのオンライン参加者とつながって楽しい時間を過ごしました。

終了後の懇親会も、オンラインと対面飲みの併用です。いつもの中華屋さんには日本語があまり得意でない料理人しかおらず、ラストオーダーも10時と早くなったので、茗荷谷の「はなの舞」へ繰り出しました。お店はAfter コロナの解放感か、やたらにぎわっています。中央大学法学部が今春から移転してきたこともあり、茗荷谷周辺は人であふれかえっています。学生の新歓コンパか職場の歓迎会かわかりませんが、お店のにぎわいも相当なもので、ハイブリッド飲みはこの環境では厳しいものがありました。22時過ぎでハイブリッド飲みは中締めとなりましたが、リアル組はもう1時間ほど楽しみました。対面はいいですね！